

## 非漢字系文字と漢字

非漢字系の漢字関連文字は、漢字と系統を異にするが、文字組織のいずれかに於いて漢字の影響を受けた文字あるいは逆に漢字に何らかの影響を与えた文字である。

そもそも漢字関連文字は文字を系統分類しようとしたものではない<sup>1</sup>。漢字に由来する文字は当然のこととして、異系統の文字もできる限り取り込む。ここに、この枠組みの特徴がある。このような枠組みによって中国周辺の漢字関連文字を眺める目的は、「異なる民族の接触によって何が生じたか。それを、文字組織をとおして見てみよう」ということである。

ここではソグド文字、ウイグル文字・モンゴル文字、満洲文字、パспа文字、ハングルをとりあげる。

### ■文字組織

上で“文字組織をとおして見てみよう”と述べた。この文字組織ということについて確認しておきたい。文字は、それぞれ、ある特徴と働きの下に一定のまとまりを成している。この文字の一定のまとまりを「文字組織」と呼んでいる。文字組織は、ひとつひとつの字形を中心にして成り立っているわけであるが、それだけではない。それぞれの文字組織は以下の5つによって緩やかなまとまりを成している。

- ①文字を組み立てる要素とそれによって作られた文字
- ②文字要素を組み合わせて文字を作る方法
- ③文字を互いに区別する方法と同類にまとめる方法<sup>2</sup>
- ④表意と表音の方法
- ⑤縦書き・横書き・分ち書きなどの文字配列法

このなかの⑤文字配列法すなわち文字を書き進める書写方向が、文字に属す特徴であるのかと疑問に思われるかもしれないが、書写方向の習慣はそれぞれの文字と強く結びついている。このことは古くより言われていることであり<sup>3</sup>、わたしもその通りであるとおもう。

なお、これからとりあげるソグド文字・ウイグル文字・モンゴル文字・満洲文字はソグド系文字と称されるものであり、既に長い伝統を持っており牢固な文字組織であるように

---

<sup>1</sup> じつは注13の周有光1989に類似の文字の枠組みが既にある。周有光1989は、字形の系統、文字を構成する点画の用法、方形であるか否かという文字の外形によって、東アジアの19種（漢語漢字、江永婦女字（女書）、壮字、布依字、侗字、水字、白字、哈尼字、彝字、傣僳字、瑶字、苗字、西夏字、契丹大字、契丹小字、女真字、朝鮮文（ハングル）、喃字、日文）の文字を「漢字式文字」としてまとめ、その発展を論じた。字形の系統だけでなく文字の形式も含めて枠組みを設定したところは、西田龍雄1981と同様である。西田龍雄1981は漢字系文字の中に契丹文字、西夏文字、女真文字を加える。周有光1989の文字の範囲は西田龍雄1981より一層広がっているが、やはりこれも系統分類の一種であろう。なお周有光1989の構想は早くは周有光1987の附註に見える。

<sup>2</sup> 文字の区別（示差）として、平仮名の「ろ」と「る」、「わ」と「ね」、「め」と「ぬ」などが同じ手順で区別されていることを挙げることができる。この指摘は西田龍雄1987にある。文字を同類にまとめる（示同）方法として「だ、ば、が」などの濁点がある。このような示差と示同の機能により文字組織の一部である字形は緩やかなまとまりを成している。

<sup>3</sup> 古くは元の盛熙明著『法書考』で東アジアにおける書写方向の三つのタイプに言及する。すなわち、漢字は縦書き、梵字は左から右に進む横書き、カローシュティー文字は右から左に進む横書きというもの。新しいところでは、西田龍雄1984の22-24頁がある。

みえる。その点は漢字も同様である。しかしながら、両者の不断の接触により、文字組織全体からながめるならば、一時的であれ恒久的であれ、互いに影響を与え合っており、そのような影響の痕跡を見て取ることができるのである。

参考文献<発行年順>

西田龍雄 1984. 『漢字文明圏の思考地図』 PHP 研究所。

西田龍雄 1987. 「漢字の生成発展と“擬似漢字”の諸相」, 『書道研究』1987:9, 31-41 頁。

橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編著 1987. 『漢字民族の決断—漢字の未来に向けて』, 東京：大修館書店。

周有光 1987. 「漢字文化の歴史と将来」, 『漢字民族の決断—漢字の未来に向けて』 橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編著, 東京：大修館書店。

周有光 1989. 「漢字文化圏的文字演変」, 『民族語文』1989 年第 1 期, 37-55 頁。

西田龍雄 2002. 『アジア古代文字の解説』, 東京：中央公論新社。もと『アジアの未解説文字』東京：大修館書店, 1982 年。

(文責：吉池孝一.2010.2.16)